## 【発題】

心光寺住職　宮岳文隆（釈文龍）

（二〇一二年一月一八日実施）

■新年おめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。今日は総員七名と少人数ですが、先月も申しましたように継続していくことが大事だと思っています。「継続は力なり」で、参加者の多少に関わらず毎月継続したいと思います。今年から平日開催が多くなるかと思いますがご出席をよろしくお願いします。

さて、今日は大石先生の書信集の第十二信「二男への手紙」を拝読しました。私は毎日「書信集」を拝読してまいりましたので、もう何巡目かになっているわけですが、こうして聞法会で輪読すると、事前に何回も目を通させてもらいますので有難いなと思っています。毎月一信ずつの輪読ですから、進捗はゆっくりですが、逆に精読のよい機会ではないかと思います。

第十二信は「二男への手紙」ということで、大石先生が五十歳位の時に二男の示朗さんへ宛てて書かれたものです。先生は六十四歳の時にKさんとの出来事によって回心されたわけですから、それより十四年位前のことになります。そういうふうに回心はずっと後のことになるわけですが、五十歳位の時に二男さんへどうしても伝えたいことが脳裏に浮かんでお手紙を書かれたことが主題になっております。掲げておる聖教のお言葉は、『教行信証』の「信巻」に、

謹んで往相の回向を案ずるに大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。

（聖典一五七頁）

とありますが、この文を書信の冒頭に掲げておられます。

この行ということについては大石先生に思い出があって、藤解先生に二十五歳の時初めてお会いした時に、この行のことを問われたのです。「真宗に行があるのですか？」と問われたそうです。藤解先生は「ある」と。大石先生「どんな行ですか？」。藤解先生、「南無阿弥陀仏と称うることが行です。しかしこの行は大行というて人間がする行ではありません。仏様がされる行だから大行というのです」。そういうやりとりが二十五歳の時にあった。そのことを大石先生は思い出しながら息子さんに手紙を書いておられるわけです。

■この十二信の中で私は三点ほど大事な箇所を押さえておきたいと思っております。第一は『直筆書信集』一一九頁（樹心

社刊『生まれてよかったですか』九五頁）に「禅宗で御化導を頂いた私に『直指人心　見性成仏というても、こうならねば分かりやせん、せん』と。藤解先生が最初の時に大石先生にこう言われたと書いておられます。「直指人心　見性成仏」というのは、禅宗では有名な言葉です。禅宗では「不立文字」と言って、文字や教学を挙げずに、直接的な見性体験に重きをおくわけです。大石先生は当時、臨済宗の妙心寺で座禅をしておられたわけですが、藤解先生はそのことをご存知の上で大石先生に名指しでそういうことを言われたわけです。『『直指人心　見性成仏』といっても、こうならねば、わかりやせん、せん」と。

「こう」とはどういうことか。「こう」とは、一一八頁（樹心社刊『生まれてよかったですか』九四頁）の中程に「大切なのは阿闍世も提婆も自分であると思えなかったら、この教行信証は一語も読めませんよ」と言われた。これを「こう」と言っておられるのですね。いくら「直指人心　見性成仏」と言っても、阿闍世も提婆も自分であるというこのことが自覚出来なかったら、『教行信証』は読めませんし、「直指人心　見性成仏」と言っても、言ってるだけだと。「こう」というのはその点を押さえて言っているわけです。

こういう調子で最初の席から、自分の値打ちを知れと、私めあての御説法でした。張りつめておった心がゆるやかになりました。そして救いは私の考えていた方向とは別の世界から与えられると、最初のお席からそういうことが思われました。

（『直筆書信集』一一九頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』九五頁）

ここですね。大石先生は助かってないから藤解先生の所に聞きに行ったんですが、しかし助かってないにしても、我々もそうですが、矢張り救いを求めて助かりたいと思ってあちらこちらの聞法会に行くわけですけど、自分なりにこういう方向に救いはあるだろうというものを皆持っているんですね。大石先生もそうだったんですね。ところが、ここで先生は書いておられますが、「救いは私の考えていた方向とは別の世界から与えられると、最初のお席からそういうことが思われました」と。

助かっていないけど、助かるとはおそらくこの方向ではないだろうかというものを、言葉にせんでも皆それぞれ持っているわけです。大石先生にもそれがあった。けれども、藤解先生の御法話を最初に聞いた時に、自分が最初に考えていた方

向と全く別な方向に救いはあるんじゃないかということを、最初の時から感じたということです。藤解先生のお話がそういうお話だったということですね。自分の考える方向と、実際に浄土真宗の教えて下さる救いとは、全く違う。自分が思っていたところと全く違うところに、実は救いはあるんだと。

これはここと、それから次の所もそうですね。

在家止住の輩です。形は精進しておるようにみえましても長年うろうろと不安な思いで過ごして来ました。

『『信心浅くとも本願深き故に、たのめば必ず往生す』助かる者ではないからこそ、お助けにあえる。見捨てられたところに、救いから洩れたところに、仏様の方から救いの御手はさしのべられていたのです。

（『直筆書信集』一二六頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』一〇四頁）

これもですね、要するに自分が助かりたいというのは、自分の助かりたい方向を持っているんですが、それと全く違う。実はそれが破られて、もう助からん、見捨てられた、救いから洩れたと。自分の求めるこの方向に救いがあると思っておる。それから外れた、洩れた。そこに実は「仏様の方から救いの御手はさしのべられていたのです」と。ここが大切な点じゃないかと思います。

■今年年賀状をいただいた中に、心にひかれる賀状がありました。あるご婦人からですが、「暗くて苦しい長い長い道のりを歩み続けています。気持ちばかり焦っています」と書かれていました。要するに苦しいわけですね。しかも長い間そこから抜け出せなくてもがいているんですね。何とかそこから抜け出したいと思えば思うほど抜け出せない。「気持ちばかりが焦っています」と、こういう賀状です。私はこの賀状のことを坊守にも話しましたが、何か有難くて、抜き出して机の上に置いてます。本人は「苦しく長い長い道のりを歩み続けています」と書いてあるんですけど、それが有難く聞こえて来たのは何故かというとですね、そういう苦しみの言葉がですね、そこに仏様の声が聞こえる感じがしたんですね。もっと言うと、仏様というのは法蔵菩薩のことですね。法蔵菩薩の声を聞くような気がしたんですね。

で、これと同じような声を、実は今日お配りしたプリントの法然上人の伝記にも感じるのです。二人のお弟子さん、聖光と聖覚という有名なお弟子さんが書かれたものです。法然上人の伝記は沢山あるんですが、法然上人のご一生の中で一番

私が心打たれる場面は、ちょうど四十三歳の時に回心なされた場面です。その部分を二人の方がそれぞれ表現は違いますが書いている。それを抜き出したんです。ちょっと読んでみます

【資料①】

□わが身は戒行において一戒をもたもたず。禅定において一もこれを得ず。智慧においても断惑証果の正智を得ず。しかるに戒行の人師釈していわく。尸羅（戒のこと）清浄ならざれば三昧現前せずと。また凡夫の心は物にしたがいて移りやすし。たとえば猿猴の如し。まことにもって散乱して動じやすく、一心しずまりがたし。ここに予が如きは既に戒定慧の三学の器にあらず。この三学の外にわが心に相応する法門ありや。よくこの身にたえたる修行ありやと万の智者に求め、一切の学者に訪ぬるに、これを教える人なく、これを示す倫もなし。しかる間、なげきなげき経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向い、手づからこれを披きこれを見るに、善導和尚の『観経疏』に「一心専念弥陀名号行住坐臥　不問時節久近　念々不捨者　是名正定業順彼佛願故」という文を見えてのち、我等がごとくの無智の身は偏にこの文をあふぎ、もはらこのことわりをたのみて念々不捨の称名を修して決定往生の業因に備ふべし。ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく弥陀の弘願に順ぜり。「順彼佛願故」の文、ふかくたましいにそみ、心にとどめたるなり。

（聖光『徹選択集』）

□法は深妙なりといえども我機総て及び難し。経典を披覧するに、その智最愚なり。行法を修習するに、その心翻って昧し。朝な朝なに定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕べ夕べに出離の縁の欠けたることを悲嘆す。忙々たる恨には、渡しに船を失うが如し。朦々たる憂には闇に道に迷うが如し。嘆きながら如来の経法を習ひ、悲しみながら人師の解釈を学ぶ。報恩蔵に入りて一切経を披覧すること既に五遍に及びぬ。然れどもなほ未だ出離の要法を悟り得ず。愁情弥々深く、学意増々盛なり。ここに善因忽に熟し、宿縁頓に顕れ、京師善導和尚勧化の八帖の聖書を拝見するに、末代造悪の凡夫、出離生死の旨を判定し給えり。ほぼ管見して未だ玄意を暁めずといえども、随喜身に余り、身毛いよだちて、とりわけ見ること三遍、前後併せて八遍なり。聞く人無かりしかども、予が如き下機の行法は阿弥陀仏法蔵因位の昔かねて定め置かるるやと声高に唱えて感悦髄に徹り、

落涙千行なりき。

（聖覚『十六門記』）

◇　◇　◇

まず始めに聖光の書かれたものですね。大石先生も行について取り上げておられますが、仏教の代表的な行は「戒・定・慧」の三学です。ところが法然上人は、戒においてもわずか一戒すら自分は持つことができない。定（禅定）においても一つもこれを得ず。慧においても「断惑証果の正智を得ず」と。「ここに予が如きは既に戒定慧の三学の器にあらず。この三学の外にわが心に相応する法門ありや。よくこの身にたえたる修行ありやと万の智者に求め、一切の学者に訪ぬるに、これを教える人なく、これを示す倫もなし」。当時の仏教界において智慧第一と言われた法然上人がですね、こういうことを言われている。比叡山や奈良の高僧方も「法然上人は凄い！」と、皆がこぞって称讃するほどの人です。

けれども、その法然上人が御自身のことを振り返ると、「戒・定・慧」のいずれも出来ないと。この私のような者に間に合うような行があるのだろうかと。「戒・定・慧」の道において自分は失格者だと。このような自分に相応しい行はあるのだろうかと。追いつめられるような気持ちで、「万の智者」、当時の代表的な仏教者を訪ねてそれを求めた。だが有名な諸師に尋ねたが誰も教えてくれない。「これを教える人なく、これを示す倫もなし」。だから頼る人もいない。誰に聞いても、既に法然上人も知っているようなことしか教えてくれない。自分が知ってる以上のことを教えてくれる人は一人もいない。どうにもならんようになって、一切経を五遍も読んだと言われている法然上人が、「しかる間、なげきなげき経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向かい手づからこれを披きこれを見るに」と。即ち目をつぶってエイッと手に取って開いて見たということです。それがたまたま善導大師の『観経疏』だったと言われている。だが実際は、「もしかして」という思いがやはりあって開いたと思うんですね。

ともかくその善導和尚の『観経疏』において「一心専念弥陀名号　行住坐臥　不問時節久近　念々不捨者　是名正定業　順彼佛願故」という言葉に出遇った。「一心専念弥陀名号」、とにかく心を一心にして、一つにして、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と阿弥陀仏の名号を専ら念じなさいと。それも「行住坐臥」、歩いている時も家に居る時も、座っている時も寝ている時も。また「不問時節」、季節を問わずに何時でも。そして「久近」、時間の長短も問わず、「念々不捨」、絶

えず止めずに専ら念仏一つを称えて行きなさいと。是を正定の業と名付けるのである。是こそが仏が定めて下さったお浄土に生まれることのできる定まった業だと。業という時は私の生活になるまでということである。それが仏が定めて下さった正しい浄土に生まれる生活である。その様にすることが「順彼佛願故」、彼の仏願（阿弥陀仏の本願）に順うことになる故にと。兎に角、常に念仏して行くことが阿弥陀仏の本願にかなうことになるのであるからと。

この文に出遇ったその時に、この文が法然上人の胸を刺し貫いたわけです。そして「我等が如くの無智の身は偏にこの文あふぎ、もはらこのことわりをたのみて念々不捨の称名を修して決定往生の業因に備ふべし。ただ善導の遺教を信ずるのみあらず、又あつく弥陀の弘願に順ぜり。『順彼佛願故』の文、ふかくたましゐにそみ、心にとどめたるなり」と。特に「順彼佛願故」、仏の本願に順うのであるというこのお言葉が法然上人の魂に深く沁みとおり、深く心に留まったと。聖光という方が四十三歳の時の法然上人の回心の状況をこの様に書いておられます。

■それから聖覚、親鸞聖人も尊敬しておられた先輩で『唯信抄』をお書きになられた聖覚法印は、ここのところをどう書かれているかというとですね・・・。「法は深妙なりといえども我機総て及び難し。経典を披覧するに、その智最愚なり。行法を修習するに、その心翻って昧し。朝な朝なに定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕べ夕べに出離の縁の欠けたることを悲嘆す。忙々たる恨みには、渡しに船を失うごとし」。もうどうしていいか分からんわけですね。「忙々たる恨みには、渡しに船を失う如し」。大きな河が行く手をさえぎっているが渡って行く船がない。「朦々たる憂いには闇に道に迷うが如し」。もう暗闇の中でどう進んでよいか道が分からない。そのように法然上人の心境をたとえているわけですね。そして「嘆きながら如来の教法を習い、悲しみながら人師の解釈を学ぶ。報恩蔵に入って一切経を披覧すること既に五遍に及びぬ。然れどもなほ未だ出離の要法を悟り得ず。愁情弥々深く、学意増々盛なり。ここに善因忽に熟し、宿縁頓に顕れ、京師善導和尚勧化の八帖の聖書（『観経疏』）を拝見するに、末代造悪の凡夫、出離生死の旨を判定し給えり。ほぼ管見して未だ玄意を暁めずといえども、随喜身に余り、身毛いよだちて（身の毛が逆立って）、とりわけ見ること三遍」と。「何かあるぞ」と鳥肌が立ったわけですね。そして「随喜」、体中から喜びが

あふれ出たわけですね。それから憑(つ)かれた様に八回読みなおした後、「聞く人無かりしかども」、誰も聞く人はいなかったけれども、「余が如き下機(げき)」、私の様な劣った機のための行は「阿弥陀仏、法蔵菩薩因位の昔」、阿弥陀仏が法蔵菩薩として御修行された遥か遠い昔の時に「かねて定め置かるるやと」、もう遥か昔に私のような下機(げき)の者のための行を選んでおってくださったのかと、「声高に称えて感悦髄に徹り、落涙千行なりき」。もう涙がぼろぼろと止めどもなく溢れ出たと。こう聖(せい)覚法印(かくほういん)が書かれています。

■ここは要するに、先ほどの年賀状の方の苦しみと法然上人の苦しみと、ある意味で重なりますね。我々の苦しみも同じじゃないかと思います。私どもは喘(あえ)いでいるもしれないが、法然上人は偉いから、法然上人の苦しみと私どもの苦しみとは全く違うんだと。そういうことではないと思います。やはり同じように喘ぎ苦しんでおるわけです。

ところで喘いでいる時の私どもというのは、何とかしてそれを抜け出したい。そんな自分じゃ駄目だ。そんな自分を改めていかないと救われないと、そういうふうに救いを求めているわけです。法然上人もそうだったのであろうと思います。

ところが聖覚法印が書かれておりますように、「余が如き下機(げき)の行法は阿弥陀仏法蔵因位の昔かねて定め置かるるやと声高に称えて感悦髄に徹り、落涙千行なりき」と。つまり私どもは何とかして「余が如き下機(げき)」の自身から抜け出したいと思っていたが、法蔵菩薩はその下機(げき)の私を待っておられたわけです。自分は何とかして抜け出したいと思っていて、救いはその抜け出した向うにあると思っていた。ところが法蔵菩薩はそのように抜け出したいと苦しんでいるところの自分を待っておられた。それが「一心専念弥陀名号」の心です。これはつまり、「そのお前のままでただ念仏しなさい」ということです。

■これは『歎異抄』の第二章によりますと、親鸞聖人も随分苦しまれて比叡山で二十年間求めた結果、ついにどうにも道がなくなったわけです。そして比叡山から下り、六角堂に百日籠り、法然上人の所へ百日通い詰めて聞き取ったものがこれですね。表現は違いますが「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と。「ただ念仏しなさい」というおおせに出遇ったわけです。法然上人も善導大師の「一心専念弥陀

名号」に出遇ったわけです。親鸞聖人も「ただ念仏してたすけられなさい」という法然上人の勧めに遇うたわけです。我々では、大石先生の「念仏しなさい」という勧めに遇ったわけです。

だがその勧めというのはですね、たとえば法然上人が出遇った善導大師の勧めは、実は善導大師も出遇った勧めです。善導大師ご自身もその勧めに出遇われたんですね。その勧めに法然上人も善導大師を通して出遇ったわけですね。つまりこれは「阿弥陀仏の勧め」なんですね。人の勧めではない。師が勧めるということじゃない。師が出遇った「阿弥陀仏の勧め」に、師を通して出遇ったわけですね。我々が行き詰って、師に出遇って「ただ念仏しなさい」とこういう声を聞く時は、師を通して、師の出遇った「阿弥陀仏の勧め」に出遇うわけですね。

で、その阿弥陀仏は、言葉でいうと「念仏しなさい」と、こういうふうに勧めているわけです。だから法然上人はそれに順って念仏する人になったわけです。一日に七万遍の念仏というふうにひたすら念仏をされて一生を終えられたわけです。「念仏しなさい」という声を聞き取り、文字通りその通りに念仏していかれた。

だからこれだけを見ると、法然上人は「念仏しなさい」という行の勧めに出遇ったようにしか見えない。だけども法然上人が出遇ったものは何だったかということをよくよく考えてみると、「念仏しなさい」という行の勧めを通して、実は「念仏しなさい」と呼びかけてくる阿弥陀仏の「心」に出遇われたと思うのです。その「心」とはどういう心かというと、どうにもならず、にっちもさっちも行かず、あらゆる行に行き詰まっている人に対して、「この行をしなさい」と言ってるんじゃないんですね。「もう行はせんでもよい。そのまま来い」と呼びかけている。そういう声に出遇ったんですね。それが「ただ一心に念仏しなさい」という声であったわけです。そういう声を聞き取られたのだと思うのです。日課七万偏の念仏は、その声を一生涯聞き続けていこうと決意された法然上人の応答の証（あかし）ですね。

同じように『観無量寿経』の下品下生（げぼんげしょう）のところでは、「臨終の悪人」は、善知識が最後の手段として勧めるところの「仏を念じる」ということすらも出来なかったわけですね。「この人、苦に逼（せ）められて念仏するに遑（いとま）あらず」と。ここで一切の行に行き詰ったんですね。その時に「善友告げて言わく、『汝もし念ずること能わずは、無量寿仏と称すべし』と」。「仏を

念ずる」という行は善知識が「臨終の悪人」に対して、最後に唯一残った手段として与えた行です。それが出来ない。ということは、もう一切の行が出来ないということです。だからここで善友が「汝もし念ずること能わずは、無量寿仏と称すべし」と告げているのは、もう行を勧めてるんじゃないんですね。行じゃなくて、「その汝を待っている」と。行の出来ない汝の存在そのものを待っているということですね。

そういうものに法然上人は出遇われた。その時の様子が伝記に書かれているわけです。

■ですから私どもが求めている方向は、やはり行を求めたりしますけど―立派な者になりたい、変わりたいというのは行を求めているわけですが―行では最終的には救われないということですね。親鸞聖人も二十九歳の出遇いの時に、こう書かれている。「雑行をすてて本願に帰す」と。本当なら「雑行をすてて正行に帰す」とこう書かなければならんところです。ところがそうは書いてないのです。雑行即ち念仏以外の様々な行を捨てて、南無阿弥陀仏という正行に帰したと、こうは言わずに、「本願に帰した」と。

これは「念仏を称えなさい」というその「心」に出遇い、その「心」に帰ったということです。それを信というんです。

「行を捨てて信に帰した」と、こう言ってもよいですね。浄土真宗の根本は行でなくて信なのです。だから大石先生が最初に行のことを、「真宗に行があるんですか」と問うたら、藤解先生は「ある、南無阿弥陀仏と称えることです、けれども大行というて人間がする行でなくて、仏様がする行だから大行という」とこう答えている。

だから人間においては行というのは、つきつめていくと出来ないわけです。念仏も易行といわれていますけど、本当に行じるとなると、やはり行き詰ります。ある先生が言われてました。三日間も称え続けると、簡単な様に見えるが苦しくなったと。難行なんです。行ということが出来ないわけです。

だがこの信ということでも、我々が間違うのは「自分が信ずるのだ」と。それは出来ない。若存若亡（「ある時はさもと思う。ある時はかなふまじと思う」という親鸞聖人の注がある）です。そうでなくて、信は如来様が私を信じて下さっておる信です。だから大信といいます。曽我先生（曽我量深先生）の言葉で言えば、「如来我となりて、我を救いたもう」と。これは如来様の行としての大信です。

■先ほど皆さん方が感話で色々な問題を話されましたが、そのように問題のある所に如来様はおられるということです。何かどうにかなることが我々の救いと思っていますが、実はどうにもならんところに、もがいているところにおるんですね。それが如来の行なんです。如来の行とは、「如来我となりて」と言われる。如来が我となってくださる。その我とはどういう我かというと、先程の賀状のご婦人の方の所で言えば、「暗くて苦しい長い長い道のりを歩み続けております」というその我である。本人は「焦ってそこから抜け出たい」と思っているわけですけども、如来の行というのはそういうもがいている我の所に働いておられる。

それが如来の大行です。それを名号という。名号というのは南無阿弥陀仏です。単なる呪文でなくて「南無」です。「南無」というのは阿弥陀仏が我となってくださることをいう。どんな者にもなるんです。それを「われら」という。如来様はどんな私であっても「われら」と言って下さる。これは凄いことですね。

本当に私どもは、少し考えてみますとわかりますが、なかなか「われら」とは言えません。先ず自分自身について、「われら」とは本当に言えないでしょう。本当に苦境に陥ったら、自分のことでも、とても「われら」とは言えないです。また他人でしたらなおさら言えない。「あの奴」とか「可愛そうに」とかしか言えない。私どもは軽蔑する人を見れば、「あんなふうにはなりたくないな」などと思う。だから「われら」とは、とても言えないです。しかし法蔵菩薩という方は、どんな人に対しても「われら」と言うんですよ。

それを一番端的に示すのが「唯除の文（ゆいじょもん）」ですね。「唯除五逆誹謗正法（ゆいじょごぎゃくひぼうしょうぼう）」とありますが、もうそのような者と一つになるわけです。「われら」というのは、そのような者と同体して「われら」というんです。「ら」を「われとする」。「唯除五逆誹謗正法（ゆいじょごぎゃくひぼうしょうぼう）」というのは、世界中の人から除かれた存在をあらわす。他が見捨てるばかりでなく、自分自身も見捨てる。情けないような私に対しては、先ず真っ先に自分が認めることが出来ない。そういうふうに一切から除かれた私を、法蔵菩薩だけは「われ」とされ、一つになってくださるのです。

善いとか悪いとかじゃないんです。善い悪いを度外視するんです。私ども人間はどうしても善悪を言います。「善いもの」にはなりたいし「悪いもの」にはなりたくない。だから「悪いもの」については、他人であれば軽蔑するし、自分であれば、死んだほうがましだと思う。善悪の価値基準があって、

善いものは受け入れるし、悪いものはどうしても受け入れられないんです、自分自身であっても。

ところが法蔵菩薩の大行、名号、「南無」というのは、善悪を言わない。もうその人は「そうあるしかない」ものを生きている。それを宿業というんですね。完全な人というものは少ない。疾病や癖などがあって、それを何とかして治していこうとするが、どうしても治らない場合があるでしょう。生まれつきのものを抱えている人の場合、それで駄目だと言われたらもう死ぬしかない。

法蔵菩薩はそれをよく分かっているんですね。その人はそういうふうに生きて来た、それしかないんだと。それで「そのあなたのままでいいんだ。そのあなたを我とする」と言われるわけです。その決意を「われら」とこう言うんですね。人間にはどうしても出てきません。法蔵菩薩だけはこう言われる。こう言ってくださる仏様は他にはいない。法蔵菩薩だけです。

法然上人は行き詰まられた。「戒・定・慧」の三学いずれも出来ない。しかしそのような出来ないあなたを待っていると。出来ないあなたを私とすると。それが法蔵菩薩の誓いであり、それを名号、南無阿弥陀仏というんです。

そういうものに法然上人は出遇われたんですね。上人は本当に行き詰って、「この三学の外に我が心に相応する法門ありや」と。もう三学では自分は駄目なんだということがよく分かった。ではそれ以外に何があるのかと。そもそも行がなかったら仏道は成就しないではないかと。そういうぎりぎりの所で尋ねて行くんですね。三学の出来ないこの私に出来るような行があるのかと。万（よろず）の智者、あらゆる智者・学者に尋ねた。けれども教えてくれる人がいない。

おそらくそうだと思います。法然上人の求めていたものは、当時の日本では前人未到といってもよい。当時の仏教者は皆が行の所で生きているわけですから。しかし法然上人はその先に進んでいます。諸行というが、法然上人は人間にかなう行などほんとは無いんだということをすでに感じている。ではどうしたらよいのか。

これは日本仏教史上ここから先に進んだ人は、当時としては一人もいなかったわけですから、誰もその問いに答えることのできる人はいなかったと思うんですよ。だから法然上人の行き詰まりは画期的というか、行を超えたものに出遇う以外にどこにも救いはないという所に来ているわけですから。

その法然上人にとっての突破口が何であったかというと、

それが善導大師の「一心専念　弥陀名号」だった。「ただ念仏しなさい」という善導大師のお言葉だったんです。

これは一見善導大師が「この行をしなさいよ」と言ってるように聞こえる。また法然上人の当時においては、未だこの呼びかけの真意は充分に明瞭になってはいない。それで法然上人は、念仏は阿弥陀仏がこのような私のために特に選ばれたところの正行であると受け止められ、その呼びかけを文字通りに受けて実践していかれた。ところが親鸞聖人になると、行と受け取っていない。法然上人は「諸行を廃して正行に立つ」と言われて、一生涯その通りの生き方を貫かれた。だが親鸞聖人は、法然上人は本当は信に出遇われたのだと確信しておられたと思うのです。信といっても如来の信ですね。親鸞聖人は「雑行を捨てて本願に帰す」と言われた。つまり「ただ念仏しなさい」と呼びかけているところのその本願の「心」に出遇ったんですね。「あなたはもういずれの行も出来ないんだ」と。「だが私はそのあなたを待っているんだ」と。そういう本願の声に出遇われたわけですね。それが法然上人や親鸞聖人の出遇われたものであったと思う。大石先生もKさんによってそういうものに出遇われたと思います。

■『直筆書信集』一二六頁（樹心社刊『生まれてよかったですか』一〇四頁）には、「助かるものではないからこそ、お助けにあえる」と書いておられます。ところが五十歳の時に二男の示朗（じろう）さんに宛てた手紙については、その当時を振り返って、『『極速円満す、真如一実の功徳宝海なり』と申されます世界は、まだまだ彼方の事です」（『直筆書信集』一二六頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』一〇三頁）と書いておられます。当時は本当に出遇うべきものにまだ出遇ってないと。本当に出遇うべきものはまだまだ「彼方」のことですと、こう書かれています。実際その当時は、六十四歳の回心の時からするとまだ十四年前のことです。

ではその「彼方」とはどういうことかというと、その当時は、先生はまだ救いを求めているんですね。ところが第十二信を書いておられる現在では「助かるものでないからこそ、お助けにあえる」と書いておられる。これが五十歳の時からみると「彼方」ということになると思います。つまり自分の足元について、こんな自分では駄目で、求めている状況の所まで行けたら助かるだろうと思っている。そのことが「彼方」なんです。

つまり我々は何を見失っているのか。何を回復せんといけ

ないのか。そのことがはっきりしてない。それが我々においての「彼方」ということになると思います。回復しなければならないのは何かということですね。救いをどうしても自分の「上」の方に、あるいは「先」の方に求める。たとえば駄目な自分を克服してそこから抜け出した所が救いだと思う。だから見失っているのはそういうふうな救われた状態の自分だと、こういうふうに思っている。回復しなければならないものも、駄目な自分を克服したところの立派自分であると、そういうふうに思っている。

けれどもそういう方向には救いはないということです。実は見失っているのは何かというと、自分の足元なんです。我々は苦しんだり喘(あえ)いだりする。そうするとそのような迷いや煩悩がなくなることを求めますが、そうでない。「我々は煩悩を見失っている」。こうよく佐野先生（佐野明弘師）がいわれます。「我々は迷いを見失っている」んだと。

我々は煩悩をなくしたり迷いをなくしたりしようと思っているが、実は見失っているのは煩悩や迷いの方を見失っている。実はそれを一番見失ってないのは法蔵菩薩なんです。

法蔵菩薩は我々の煩悩を我々以上によく知り、我々の迷いを我々以上によく知っているんです。そしてそういう迷いや煩悩から抜け出せない私どもに対して―私の方は何とかしてそれから抜け出したいと思っているのに―法蔵菩薩はそれを「われら」として下さるんです。その法蔵菩薩の心を見失っているわけです。

そういう煩悩の自分を離れたいというのは、やはり法蔵菩薩の心を見失っているということになります。そういう根本的な取り違えというか、そういうことがあります。どうしても我々は向上心というものを生まれつき持っているので、我々が今在るその先に救いが有るように思いますけれども、実は見失っているのは足元なのです。そういうことを大石先生がこの手紙の中で語って下さっておられるように思います。それがこの書信の一つの要点です。

■それからあと一つの要点は、この書信の中に次のような文章があります。

どんなに偉そうなことを言うても、腹の底は少しもそれが身についておらぬ。表面はどんなに飾っても、腹の底は浅ましい凡夫の姿むき出しである事実に気づく程、人間は不思議な光りを感じ、安らぎを身に覚えるものです。

（『直筆書信集』一二三頁・樹心社刊『生まれてよかった

ですか』　一〇一頁）

どうですか皆さん。普通は心が浅ましかったら駄目だと思うんじゃないですか。「腹の底は浅ましい凡夫の姿むきだしである事実に気づく程、人間は不思議な光りを感ずる」。普通はそういう凡夫の姿を抜け出し得ない事実に気付いたら落ち込むんじゃないですか。ところが大石先生は不思議なことに、「凡夫むき出しである事実に気付く程、人間は不思議な光りを感じ、安らぎを身に覚える」と、こういうふうに書かれています。

ここ以外にも

仏様は先ず『自己を知れ』と教えて下さり、何を見ても聞いても、それを自分の血肉とすることの出来ぬ心の胃をこわしておる自分の姿を知らせて下さる、それに気付くのが丈夫な心の持ち主の仏様に接近させて貰っておることになるのでありますから、教えをうけるということは自分の心を常に見つめて、常に愚かなことを考えておる我を知らせて貰うことであると、端的にそう申さずにはおれません。　（『直筆書信集』一二四頁・樹心社刊『生まれてよかったですか』一〇二頁）

こう書いておられます。教えを受けるということは、立派な自分でなくて愚かな自分を知らせてもらうことであると。

それから『直筆書信集』一二五頁（樹心社刊『生まれてよかったですか』一〇三頁）の中程に、「子に語っているのでありますが、他郷にある我が子を縁として、仏様から私のことを知らせて頂き私のことを語っています」と。大石先生は自分の息子さんに手紙を書いているようだけれども、自分のことを語っているんだと。「自分の愚かさを知らされて頂くほど、それを知らせて下さる光を感じる」（同）。ここもそうですね。普通は自分の愚かさを知らされたら、駄目だ、情けないというふうになると思います。賀状のご婦人も「気持ちが焦る」と書いておられる。ところが大石先生は、「自分の愚かさを知らせて頂くほど、それを知らせて下さる光を感じる、家の前の路を掃いている時、そのことが思えたから、家に帰り机に着いて書き始めました。それが嬉しかったから長い手紙になりました。書くことも、掃除をすることも仏様のみ力によればこそ。御師匠に『真宗には行があるのですか』とお尋ねしてから二十五年も経っています」（同）と。

行というのは普通、修行して立派な人になりたいというのが普通の行ですが、大石先生は駄目な自分、愚かな自分を知らされると「光」を感じると書かれている。この箇所も大事

なところだと思います。

■それで最後に、今までのことと関連しますが、大石先生が古田隆子さん宛に出された平成十一年二月七日付けのお手紙を読んでみます

【資料②】

□　いつものことですが、この度もお便り有難うございました。ご承知のように、私達夫婦は長男夫婦と同居しています。二年前までは想像もしなかったことです。教団というところは、表面から見るときれいに見えますが、お互い他人同志の業のもち寄りです。一般世間以上に醜い人間の心の葛藤で渦巻いています。そこで私がどんな人間かを教えていただいたのです。教団に居る時から、教団の内情を知っておる同行さんが「大石先生、学苑を出なさい。長くおったら業（悪業）をつくりますよ」と進言してくれたことがあります。内部におる在苑者も、ひそかに「外で活動された方がよいです」といわれました。一言で言えば派閥の葛藤です。著書に書いたのは氷山の一角です。だが私のように世間でもまれたことがないものは、あの教団の五十年間がなかったら、とうとう「私」を知らずに一生終わっていたでしょう。教団を出たのですから、恩知らず、誹謗（ひぼう）正法（しょうぼう）、邪見…、仏様のお救いからはずれた張本人と言われても、反論はできません。今は仏様から見られた「自分」というものを知らせて頂いたことを感謝しています。世には歴史に残るような立派な、又尊い仏者、クリスチャンが沢山おられます。私は名もない一凡夫です。心に入ってゆきますと、煩悩具足の凡夫で、少しでも落ち込むと、これではいけないと、理想に向ってそれに近づかせよう。ものごころついて、私は何十年やってきました。そのせいで、進学し、軍隊生活もできたのです。今はどうなったのか。どれほどあがいても、心の状態をどうにもできない。一起一滅する心が私の自由にならない。それが自分なのだ。一分前の心、一分後の心が自由にならないのみでなく、現在の今の心が自由にならない。これが自己なのです。煩悩具足の凡夫で、自分が自分をもてあます。いやな心であっても、それが正真正銘の私なのです。それを知らせて下さったのが、平素申し上げております仏様のご本願（教え）のおかげであります。その時ご本願の摂取のみ手の中にあったのです。そう思っておること自体が救いだったのです。私は常にそのご本願のみ声に励まされ、生かされておりま

す。『正信偈』の中に「本願名号正定業（ほんがんみょうごうしょうじょうごう）」と聖人様のお言葉です。このご本願のお呼びかけによって私は生かされております。お念仏なしでは生きてゆけない自分です。その他のことは何も知らなくてもよい。このこと一つが私が生かされている力の源泉なのです。

古田さんのお便りを読ませて頂く度に、自分のありのままを書いておられます。世間にもありのままを書き、語る人もあります。ことに、ご夫妻の会話にそれを感ずるのです。この前のお便りに「他力」について、私の母の、私宛の手紙のことを書いて下さっておられました。母が子を育てる、この母でも、子育てに身をささげる。あの手紙は母子を超えた「光」を感じたから、著書に載せました。それをご主人が「他力」ということは、あの手紙に尽きる、ということを申された。私はそれに感動したのです。

光を感ずる程、真反対の自分が見える。真反対の自分が見える程、ご本願、仏様の大悲を感ずる。そこに安らぎと底知れぬ生きる力をたまわります。（後略）

◇　◇　◇

これは古田さんからコピーをいただき、以来私も非常に大事にしている手紙の一つです。

大石先生にとって、五十一年間の教団生活の中で知らせていただいた「私」とは、自分が求めていたところの立派な私ではなかったんですね。しかしそれは自分から見た自分でなくて、仏様から見られた自分です。だから「光を感ずる程、真反対の自分が見える。真反対の自分が見える程、ご本願、仏様の大悲を感ずる。そこに安らぎと底知れぬ生きる力をたまわります」と書いておられる。この真反対の自分というのは、普通私どもはそんな自分は嫌いなんです。しかし仏様は、そういう私を待っておってくださる。むしろそういう自分に合掌しておってくださる。大石先生はそういう仏様に出遇ってくださった。大石先生が三十八年間のご苦労の結果出遇ってくださったものは、そういう仏様であったということですね。

以上、第十二信で押さえておきたい箇所として二点しか触れられませんでしたが、時間が来ましたのでこれで終わりたいと思います。

（発題終り）

## 【座談の部】

■（Ｙ）　私どもが見失っているものは何かということについてですが、私どもは煩悩を見失っているということですか？。でも煩悩そのものは持っているんでしょう？

（宮岳）持っているんだけど、見失っている。

（Ｙ）　煩悩を持っているということを見失っているということですか。

（宮岳）そう言ってもいいですが、煩悩を持っていると思っていても、煩悩が不足しているんですわ。仏様は煩悩具足ですね。

（Ｙ）　そうすると、煩悩具足ということを見失っていると。

（宮岳）そうですね。具足というのは、具（つぶさ）に、欠け目なく、充分に足りて持っている。もう持っていない煩悩はない。だから仏様は煩悩具足なんですよ。ところが私どもは煩悩が不足している。不足して、まあ自分も捨てたものではないと思っている。それに対して、たとえば親鸞聖人の場合ですと、「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべし」と言われる。だから煩悩具足している。

■（Ａ）　大行というのは、計らいを超えた、思いとは別な、いのちに本来備わっているあるがままの世界、というふうに考えていいでしょうか。

（宮岳）まあ大行というのは、「南無」なんですよ。「南無」というのは、どんな者にも「われら」となってくださる。「煩悩具足のわれら」になってくださる。だから回復しなければならないのは何かと言えば、煩悩具足を回復する。「われら」を回復するということです。

（Ｙ）　煩悩具足を回復するということは、ほんとうは仏様と同じですね。

（宮岳）そうですね。親鸞聖人に、『歎異抄』第三章に出てきますが「煩悩具足のわれら」と、こういう言葉がありますよ。

（Ｙ）　煩悩を持っているということを自覚しておればたいしたものですね。

（宮岳）たいしたものですよ。ところがそれがなかなかねえ…。

（Y）　逆な言い方をすれば、私はえらいんだと思い込んでいること自体、高上ったことになる。

（宮岳）そうですね。『歎異抄』では「自力作善のひと」という言葉がある。それを善人という。それで「善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや」と言われている。

（Y）　そうすると善人ほどみにくいものはないですね。

（宮岳）そうですね。でもそれが私のことだと知らされる。「煩悩具足のわれら」というのは仏様、要するに法蔵菩薩が言うんですね。法蔵菩薩は煩悩具足の者を「かれら」とは言わないんですよ。普通は「かれら」ですよ。

（Y）　そうですよね。普通は煩悩を持っていない人なんですね。

（宮岳）そうですね。煩悩が不足していると「かれら」と言う。しかし法蔵菩薩は決して「かれら」とは言わない。「煩悩具足のわれら」と言われる。だからどんな人に対しても「あいつらとはちがうんだ」とは言わない。だから凄いですよ。人間にはなかなかね、差別心が旺盛だからなれませんよね。だけどもそういう法蔵菩薩に遇うとね…、やはり帰り場所ですね、われわれの。実は法蔵菩薩はどっかにおるんではなくて、自分の本当の身の魂はそういうものなんですね。

（S）　私はある時或る方と電話で話していて、自分に言われていることが納得いかんわけですよ。それでとうとう「私はそんなに言われるほど悪くない！」と言った。そしたら「ああ、あんた本音が出たね」と言われた。

（Y）　それが煩悩具足を認めていないということでしょう。

（S）　そうそう。人から言われている方が自分の本当の姿を見て言っているんだけど、自分では、自分にもいいところがあると思っている。

（Y）　みんなそうなんじゃないかな。

（S）　そう。それでぽっと出た自分の言葉に自分が驚いた。何かのことで自分の本音がぱっと出る。それで始めて気づく。

（A）　世間の道徳では、物事を相対的に考えるから、私もそう悪くはないと考えるのが普通ですね。

■（宮岳）大石先生の古田さんへの手紙にあったけど、先生は教団において何を知らされたかというと、「仏様から見られた自分」を知らされたと。そこが大事な所。普

通我々でも自己反省というのはするが、自分が自分を反省している。それとどこが違うかというと、「仏様から見られた自分」というのはね、仏様は決してそういう自分をけなさない。私どもが見るときは、こんな自分は駄目だとかね、そこに必ず善悪の価値観で見る。仏様は決して善悪で見ない。どの人も、もうそうあるしかないというか、そうならざるを得んで生きているわけです。だからそこに痛みを感じて、決して責めない。もう拝んでいるんです。それが「仏様から見られた自分」です。仏様は決して、どうにもならずにあえいでいる自分を、そんなことでは駄目だとか、もっとがんばらんととかね、努力が足りんとかね、お前がなまけたせいだとかね、そんなこと言わんでね、本当にそういうあなたをね、まあ「ご苦労さん」というかね…。

（Y）　非難しないんですね。

（宮岳）そう、非難しないんです。受けとめるんです、全面的に。

（S）　人が非難するよりも、その前に自分自身が受けとめられない。

（宮岳）そう、自分自身が自分を非難する。

（S）　自分自身でね、そういう自分であってはいかんとかね。なれないのにどうして高みを望むんだろう。

（Y）　言い訳するということは、それだけ自分が…。

（宮岳）そうですね。弁解ですね。

（S）　そう。それほど自分は悪くないんだと、自分で自分に価値を付ける。

（宮岳）曽我先生（曽我量深先生）が書いておられますけどね、清沢先生（清沢満之先生）について何を思い出すかというとね、「自己を弁解しなかった人」と。東京で開かれた京浜仏教徒の会合で清沢先生の精神主義についてみんなから非難されたときに　ね、「いや私はそんなんじゃない、こうなんだ」と、普通は非難されれば言いたくなるでしょう。ところが清沢先生は一言も弁解せんかったと。あれだけ頭のいい人だから、弁解しようと思ったらいくらでも弁解できるのに、一言の弁解もせずにね、「我々は何かを主張するのではない。ただ自己の罪悪と無能とを懺悔して如来の前にひれふすだけである」と、こう言ったと。その時の清沢先生の森厳なお顔を今に忘れることができないと。清沢先生につい

て第一に思い出すのはそのことだと、そう曽我先生が書いておられる。

それに続けて曽我先生はこう書いている。なぜそういうふうに自己弁解せず黙っておれたのかというと、それは内に大きな自信を持っていたからだと。

（数名）う～ん。

（宮岳）自信がないとね、みんなから認められないと立つ瀬がない。だから人から非難されたら「そうじゃない、そうじゃない」と言わないと自分の居り場所がない。しかしみんなからどういうふうに言われても一切弁解をしないのは、底に深く自信を持っているからだと。そういうところを曽我先生は見ている。それを曽我先生は、「清沢先生は如来によってね、すでに自分は認められているんだと。そういう確信があるんだ」と言われる。

（数名）う～ん。

（宮岳）だからその上に人に認められる必要はない。そこに深い自信を見た。曽我先生の眼は鋭いですね。清沢先生は何もそんなことを自分で言っているわけではないのに、そこまで見ている。普通だったら自己弁解しなかったと感心するところで終わってしまう。しかし曽我先生は、なぜ清沢先生は自己弁解しないのだろうかと考えられたんでしょうね。そして気がついた。清沢先生はすでに如来によって深く弁護され了（おわ）っているのだと。「あんたを待っておる」と言ってね。そういう自信があるから「いや私はちがう」と言わんで済むんだと。そういう深い自信を見抜かれた。

（S）そういうのを聞くとね、やっぱりそういう所を通ってきた人に会うというのは大きいなと思う。やっぱり自分は非難されると「そうじゃない、そうじゃない」と言いたくなる。そんな中で不安やし、自己弁解したくなるところばかりやった。だけどそうしなくていいというか、まあ「言いたかったら言ってください」と言えるというのは、これはちょっと人間社会ではできない。でもそういう所を実際に通って来た人が、「こういう自分でも助かるのか」と不安に思っているときに、「いいよ、待っているよ」と。そう言ってくださる方がいたからこそ、そこをやっぱり歩んでいける。これは大きいなと思う。

（宮岳）うん。だからそこで言うとね、そういうふうに自己

弁解せずにおれない。そのときに、自己弁解せずにおれん私も認めてくれるんですね。「それでいいんよ」とね。

（S）　うん、そう言ってくださる仏さんとご本願と、そしてそこを実際に通っていった人に出遇うということが大きいと思う。

（宮岳）だから、この大行、「南無」というのはね、もうちょっと別の言葉で言うと、「随順」なんです。どんな人にも随順していく。どんな我にも随順していく。「随順」というのは、円い器に水を入れれば水も円くなる。四角の入れ物に入れれば四角になる。そういうように、仏様というのは形がないからどんな者にも随順していくわけですね。

では、時間がまいりましたので今日はこれで終わりましょう。

（座談の部、了）